

鹿 1 5 鹿の胎児 = = = 猪・鹿・狸より

肢腰がまだ不完全で、山の岨から滑り落ちるような子鹿は、親鹿一つ捕る罠にもろくろくならなのだが、それがまだ親の胎内にある間は、狩人にとっては別に一匹の鹿を捕るよりも利得になったのである。

鹿の胎児をサゴと言うて、その黒焼きは婦人の血の道の妙薬として珍重したのである。また鹿の腹籠（はらごも）りとも言うて、産後の肥立ちの悪いものなどには、この上のない妙薬とした。今日ではそう見かけなくな



たが、以前は何処の村へ行っても、真っ蒼い血の気のない顔をした女が、一人二人はきっとあったほどで、従って需要も多かったのである。

明治初年頃、普通の鹿一頭が五〇銭か七〇銭程度の時に、サゴ一つが七五銭から一円にも売れたと言うから、狩人が何を捨てても孕み鹿に目をつけたのは無理もなかった。そのため一年に一つしか増えぬ鹿の命数を、縮めることなど考える余裕はなかったのである。

サゴは春三月、親鹿が肢に脛巾（はばき）を穿いた時期が、最も効験があると言うた。脛巾を穿くとは鹿の毛替わりを形容した言葉であった。鹿は春先、木の芽の吹き始める頃から、冬の間の黒味を帯んだ毛が抜け始めて、初夏田植の盛り頃には、すっかり赤毛に替わって、真っ白い斑が現われた。この時期を、五月（さつき）の中鹿（ちゅうじか）と言うて、鹿が鹿（か）の子を着たと言うたのである。毛替わりは、肢の蹄の付根から始まって、だんだん上へ及ぼして来るので、膝まで替わった時が、すなわち脛巾を穿いた時だった。この時期に遠くから見ると、如何にも柿色の脛巾を着けたように見えたそうである。月で言うと、その時サゴは五月目であった。鼠より心持大きかったが、肌にははや美しい鹿の子の斑が見えた。

別に、サゴの最も効験ある時期を、親鹿の腹を割いて取り出した時、掌に載せて眺める程度が宜いとも言うた。晩春花が散り尽した頃は、サゴははや猫ほどに生長して、もう生まれるに間もなかった。そうなるに効能が薄いと言うて高くは売れなかった。そこで猜い狩人などは、今一度皮を剥いで形を小さくした。真っ赤な肉の塊りのようなものを、さすがに気が咎めるか、遠い見知らぬ土地へ持ち出して売ったそうである。鹿の肉もまた血の道の薬だと言うたが、角もまた熱浮しになると言うて、少しずつ削って用いるものがあった。